

創刊の言葉

兒 玉 桂 三

最近十数年間の醫學、生物學の目覚ましい發達は物理的、化學的測定方法の應用に負うところが甚だ大きい事は萬人の認める事實である。可視域に特異的な吸収を示す酵素系に對する吸収スペクトルの應用、これ等の吸収の量子力學的解釋の試み、酵素、その他の酸化還元系の電位の測定、蛋白質、核酸等の溶液の溶解度、粘性、擴散等の諸性質の溶液論的な解釋、生體の物質代謝に關する同位元素の應用、擴散速度を基礎とするペーパークロマトグラフによる分析等々、その例は枚擧に暇がない。

勿論、これ等の事實は物理化學的方法と解釋のみで複雑多岐に互る生物現象の悉くを解明する事が出來ると云う事を示すものではなく、或は、現在までに知られている分子間、原子間の相互作用に關する知識のみでは想像もし得ないような作用力が生物現象の説明に必要であるかも知れない。然し乍ら、かくの如き相互作用が存在するとしても、これを探求するために我々が爲し得、且つ爲す可き唯一の手段は現在の物理化學的研究方法を生物現象に對して充分驅使する事であり、このような方法によつてのみ生物學の飛躍的な發展が約束されるであろう事は科學史に徴しても明らかであろう。

自然科學各分野の極度に分化した發達のために同じく生物學を研究する人々の間に於てさえ、方面を異にした二分科ではその兩方面に精通する事は可成りの努力を要する。況んや、物理化學的研究の尖端に行く測定法を、生物學に應用する事は一個人では殆んど不可能に近く、廣い分野の研究者の理解と協力に俟たねばならぬ事は云うまでもない。

我國に於ては近來、生物學者の物理化學的方法に對する理解と、物理化學者の生物現象に對する興味が次第に芽生え、既にこの種の協力による業績のいくつかが學界に於て發表されている。然し、現在の状態が満足すべきものからは甚だ遠い事は勿論であつて生物學者と物理化學者の交流が

より盛になり、この方面に於て世界の學界に大きな寄與をする業績の發表されるようになる事は吾人の齊しく待望する所である。

“生物物理化學”は電氣泳動研究會の機關誌として發足し、茲に第一號の發刊を見たのであるが、その趣旨とする所は決して電氣泳動法と云う狭い一方法のみに視野を置くものではなく、前述した意味に於て廣く自然科學各分野の衆智を集めて、生物學の發展に資せんとするものである。誌名として“生物物理化學”を採用した意義も茲にある。従つて執筆者、内容の範圍も、出來る限り廣く、偏らないものとして上述した趣旨を持つ刊行物としての使命を果す事を願つてやまない。

この種の廣範圍の内容をもつ雑誌ではその範圍の廣さの故に、動もすれば内容が通俗的に流れ、學術誌としての面目を失ひ易いのが常である。この弊に陥る事なく本誌がその目的を達するためには執筆者、讀者、編集者の協力と勉強が必要な事は言を俟たないが、尋常一樣の努力でこれが可能とは思われぬ。特に清新な力に溢れた少壯學究の徒の努力と奮起に俟つ所大なるものがある。

電氣泳動研究會は電氣泳動装置の目覚ましい普及と共に、本法を用いて研究を行つている研究者の要望と協力を得て昨年秋發足したのであるが、この方法の應用範圍が極めて廣いため生物學、醫學、物理化學等の諸方面の研究者が會員として參加している。従つて、上述の趣旨を遂行するためには甚だ好適の團體と云う事が出來よう。會員や、會の運営に當る人に於ても、若い世代の人が多いので願わくは歐米の學界に對する立ち遅れを取り返して、生物學に於ての我國の特色を生かした獨創的な研究の進展のために協力と努力を惜しまざる事を望むものである。

徒に高い理想を掲げる事は容易であるが、その達成への道は日々の撓まざる實驗、研鑽と、諸員の緊密な理解協力のみである。

“生物物理化學”の創刊に當つて、その趣旨とする所を録して創刊の言葉とする次第である。